

夏秋期用蚕品種の強弱調査 1. 蚕品種と飼育環境

誌名	蠶絲研究
ISSN	00364495
著者	浅野, 清志 大野, 岩雄
巻/号	20号
掲載ページ	p. 30-38
発行年月	1957年4月

夏秋期用蚕品種の強弱調査

1. 蚕品種と飼育環境

浅野清志, 大野岩雄

夏秋期の蚕作安定の一環として、不良環境下における蚕品種の強弱を調べるために、本年初秋及び晩秋の二期において、4～5 齢を屋外飼育し更に屋外上簇を試みた成績を記して参考に供する。

1) 供試蚕品種は四国地方に普及している適良品種として、日 122 号 × 支 115 号, 日 124 号 × 支 124 号, 日 115 号 × 支 108 号 (配付系), 秋花 × 銀嶺 (配付系), 信州 × 白雪 (配付系) の 5 品種と虫質本位の品種として日 112 号 × 支 110 号, 日 112 号 × 支 115 号, 日 112 号 × 支 124 号 (未指定交雑) の 3 品種計 8 品種を用いた。

2) 屋外飼育は渡廊下の一隅に蚕架を設けて行い、飼育箔の周囲は竹箆でかこみ直射光線を避けた。

3) 供試頭数及び給桑量は、4 齢飼食後に各品種共 800 頭前後を用い、給桑回数は 1 日 5 回、給桑量は大体同量を与えるようにした。

第 1 表 初秋期 4～5 齢及び上簇中の温湿度表

月 日	天候	摘 要	温 度 (°C)						湿 度 (%)					
			屋 外			室 内			屋 外			室 内		
			最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
7.29	晴	4 齢 飼 食				31.0	23.5	27.6				90	68	79
30	〃		31.5	24.0	27.9	31.5	24.0	28.3	95	68	79	95	64	79
31	〃		34.5	23.0	29.0	32.5	24.0	28.4	90	52	67	90	66	80
8. 1	〃		37.0	23.0	29.1	31.5	23.5	27.5	85	44	70	91	72	85
2	〃	5 齢 飼 食	36.0	22.5	28.4	32.0	23.0	27.1	85	45	70	95	74	84
3	〃		36.5	23.0	30.2	32.5	23.5	28.6	85	38	60	95	62	76
4	〃		36.0	23.0	30.1	32.5	24.0	28.7	80	39	58	90	59	73
5	〃		34.0	23.5	29.1	31.5	24.5	28.3	81	50	62	85	58	74
6	〃		35.0	23.0	29.3	33.5	24.5	28.3	90	40	65	90	57	75
7	〃		34.5	22.5	29.0	32.5	23.5	28.1	80	38	58	90	48	69
8	〃	上 簇	33.0	22.5	28.3	32.0	23.0	28.1	76	44	64	81	51	68
9	〃		34.5	23.0	29.6	33.0	24.5	29.3	85	42	59	85	51	68
10	〃		34.0	23.0	29.6	33.0	25.0	29.4	85	51	62	85	62	72
11	〃		36.5	23.0	30.1	33.5	25.0	29.8	90	41	61	90	54	71

初秋期の飼育環境（温度，湿度）

掃立は7月20日で4齢飼食は7月29日であるが作業の都合上4齢2日目から屋外に出した。飼育及び上簇中の屋外並びに蚕室内の温湿度は第1表のようである。

飼育中は毎日晴天続きであったから、屋外温度は午前10時頃より午後6時頃までは常に31～32°C以上の高温で（最高極は34～37°C）、早朝でも23°Cを降ることは稀であった。従って一日中の温度較差は11～14°C前後であり、平均は29°C前後であった。又湿度は日中は50%以下となり、早朝でも85%前後で、平均は67%であった。以上のように屋外飼育は毎日晴天のために変温の甚しい高温乾燥下に経過した訳である。

次に当時の蚕室内の温湿度は、蚕室の南北両側に竹簀を下げ防暑を行ったがその効果は少なく、毎日最高は32～33°Cであり、最低でも23～24°Cで、平均は28°C前後となり、屋外との差は約1°C程度であった。又湿度は屋外より最高最低共に高く、平均は77%で屋外より約10%多かった。

初秋期の飼育成績

以上のような屋外の飼育環境下では、日中の給桑は萎凋が甚しい上に食桑状態も悪く残桑を多くしたが、夜間から朝にかけての食桑はすこぶる活潑であった。病蚕は各品種共に特に認められなかったが、時折り足長蜂の食害を被ったのでこれは供試蚕数から除いた。

飼育成績は第2表のように日122号×支115号を対照として比較すると、

1) 4～5 齢経過 日124号×支124号、日112号×支115号、日112号×支124号は256～260時間で大差なく、秋花×銀嶺は240時間で約半日短かく更に日115号×支108号、日112号×支110号、信州×白雪は230～236時間で約1日短かい。

2) 減蚕歩合（対3眠起）日124号×支124号、秋花×銀嶺、日112号×支110号は3～5%の範囲で優り、日112号×支124号は2.3%で更に優れている。しかし日115号×支108号、日112号×支115号、信州×白雪は7.8～9.4%の範囲で略々同様である。

3) 一万頭収繭量（対3眠起）日124号×支124号は17.1kgで優り、日112号×支124号は15.8kgで稍々優るが、その他の品種特に日112号×支110号、日115号×支108号は著しく劣る。

4) 一立顆数 日112号×支115号、日112号×支124号は80顆前後で少なく、日124号×支124号、日112号×支110号は86顆でこれにつき、秋花×銀嶺は105顆が多い。

5) 繭重、繭層重、繭層歩合 日124号×支124号のみは大差ないが他品種は劣る。特に繭層重においてその差は著しい。

6) 生糸量歩合 信州×白雪は18.25%で大差なく、日124号×支124号は17.79%でこれにつき、他品種は劣る。

7) 解舒 各品種共に劣り特に日112号×支124号は著しく劣る。

8) 小繭 日124号×支124号、信州×白雪は優れ、又日112号掛は略同様である。

第2表 初秋期屋外飼育成績

品 種 名	母体別	4~5 齢			減対 歩3 合起	1取 万 頭	対 3 眠 顆 数	一立 顆 数	繭重	繭層 重	繭層 歩 合	生糸 量 合	繭糸 長	繭糸 量	繭糸 度	対千 米 結 回	解舒 率	解舒 糸長	小ぶし 点
		経過 時	温度 °C	湿度 %															
日122号×支115号	支	256	29.1	66.9	8.1	14.9	100	1.81	39.3	21.71	18.46	1123	32.31	2.59	0.218	80.3	902	81.2	
日124号×支124号	支	260	29.1	66.9	4.3	17.1	86	1.82	40.0	21.98	17.79	1193	32.20	2.43	0.355	70.2	838	91.3	
日115号×支108号	支	230	28.9	66.9	8.8	13.3	100	1.61	31.8	19.75	16.60	963	26.39	2.47	0.444	70.1	675	70.5	
秋花×銀嶺	支	240	29.0	66.6	4.9	14.1	105	1.62	33.0	20.37	17.03	1149	27.41	2.15	0.286	75.3	865	70.7	
信州×白雪	日	236	29.0	66.7	9.4	14.3	91	1.68	35.8	21.31	18.25	1105	30.47	2.48	0.301	75.1	830	89.3	
日112号×支110号	支	233	28.9	66.9	3.3	12.6	86	1.68	33.5	19.94	17.07	1017	27.66	2.45	0.427	69.7	709	80.4	
日112号×支115号	支	256	28.9	67.0	7.8	14.1	81	1.72	33.3	19.36	16.42	1062	27.91	2.37	0.420	69.1	734	81.3	
日112号×支124号	日	260	29.1	66.7	2.3	15.8	82	1.74	35.8	20.57	16.86	1042	28.49	2.46	0.622	60.7	632	80.8	

日122号×支115号を100とした場合の指数

日122号×支115号	支	100			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
日124号×支124号	支	102			53	115	86	101	102	101	96	106	100	94	163	87	93	112
日115号×支108号	支	90			109	89	100	89	81	91	90	86	82	95	204	87	75	87
秋花×銀嶺	支	94			60	95	105	89	84	94	92	102	85	83	131	94	96	87
信州×白雪	日	92			116	96	91	93	91	98	99	98	94	96	138	94	92	110
日112号×支110号	支	91			41	85	86	93	85	92	92	91	86	95	196	87	79	99
日112号×支115号	支	100			96	95	81	95	85	89	89	95	86	92	193	86	81	100
日112号×支124号	日	102			28	106	82	96	91	95	91	93	88	95	285	76	70	100

第3表 初秋期室内飼育成績

品 種 名	母体別	4~5 齡			減対 蚕3 歩 合起	1收対 万 3 眠 頭量起	一立 顆数	繭重 g	繭層 重 cg	繭層 歩合 %	生糸量 歩合 %	繭糸長 m	繭糸量 cg	繭糸度 デニール	対千 米落 回数	解舒 率 %	解舒 糸長 m	小ぶし 点
		経過 時	温度 °C	湿度 %														
日 122号 × 支 115号	支	258	28.1	77.2	8.0	16.5	931.91	42.8	22.41	19.03	1195	36.54	2.75	0.267	75.9	90.7	88.9	
日 124号 × 支 124号	支	258	28.1	77.2	0.3	19.0	871.95	42.8	21.95	17.82	1175	34.39	2.63	0.321	72.6	853	88.9	
日 115号 × 支 108号	支	231	28.0	77.7	5.3	14.6	931.68	33.8	20.12	16.96	980	28.15	2.59	0.322	76.0	745	72.5	
秋 花 × 銀 嶺	支	235	28.1	77.4	4.5	14.6	981.69	34.5	20.41	16.98	1159	29.04	2.26	0.220	79.7	924	74.5	
信 州 × 白 雪	日	235	28.1	77.4	12.0	13.6	821.81	39.3	21.71	19.04	1143	33.51	2.64	0.370	70.3	804	89.2	
日 112号 × 支 110号	支	233	28.0	77.6	3.0	13.8	811.78	36.0	20.22	17.34	1033	29.48	2.57	0.381	71.7	741	79.0	
日 112号 × 支 115号	日	235	28.1	77.4	3.7	15.3	801.85	35.8	19.35	17.42	1094	29.79	2.45	0.378	70.7	774	87.0	
日 112号 × 支 124号	日	243	28.2	76.8	1.3	17.3	801.79	37.0	20.67	17.28	1077	31.11	2.60	0.725	56.2	605	83.9	

日 122号 × 支 115号を 100 とした場合の指数

日 122号 × 支 115号	支	100			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
日 124号 × 支 124号	支	100			4	115	94	102	100	98	94	98	94	96	120	96	94	100
日 115号 × 支 108号	支	90			66	88	100	88	79	90	89	82	77	94	121	100	82	82
秋 花 × 銀 嶺	支	91			56	88	105	88	81	91	89	97	79	82	82	105	102	84
信 州 × 白 雪	日	91			150	82	88	95	92	97	100	96	92	96	139	93	89	100
日 112号 × 支 110号	支	90			38	84	87	93	84	90	91	86	81	93	143	94	82	89
日 112号 × 支 115号	日	91			46	93	86	97	84	86	92	92	82	89	142	93	85	98
日 112号 × 支 124号	日	94			16	105	86	94	86	92	91	90	85	95	272	74	67	94

が、日 115 号 × 支 108 号、秋花 × 銀嶺は劣る。

なお同時に蚕室内で飼育した成績は第 3 表である。即ち各品種共に屋外飼育より、一萬頭収繭量、繭重、繭層重、繭層歩合、生糸量歩合において優れているが、各品種間の傾向は屋外飼育の成績と全く同様である。

晩秋期の飼育環境（温度、湿度）

掃立は 8 月 30 日に行い、9 月 9～10 日にわたって 4 齡飼食となったが、各々当日屋外に出した。稚蚕用桑は 7 月中旬からの旱魃のために著しく悪化し、又壯蚕用桑も例年に比し硬化していた。飼育及び上簇中の屋外並びに蚕室内の温湿度は第 4 表のようである。

第 4 表 晩秋期 4～5 齡及び上簇中の温湿度表

月日	天候	摘 要	温 度 (°C)						湿 度 (%)					
			屋 外			室 内			屋 外			室 内		
			最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
9.9	雨	4 齡 飼 食	27.5	23.5	24.5	27.5	24.5	25.9	95	86	90	95	86	91
10	雨後曇		28.5	23.5	25.9	27.5	25.5	26.8	95	71	85	86	74	82
11	晴		30.5	21.0	25.2	27.5	24.5	25.6	95	52	76	86	81	83
12	晴		28.0	18.0	23.3	27.0	23.5	25.9	100	45	74	82	70	76
13	曇後雨		23.0	18.5	20.5	26.0	23.0	24.6	94	76	86	81	72	77
14	曇	室内育 5 齡飼食	23.5	19.0	21.4	26.5	24.0	25.2	100	72	87	82	74	79
15	雨後曇	屋外育 5 齡飼食	23.0	20.0	21.0	26.5	24.0	25.1	89	84	86	82	77	79
16	雨		20.0	18.5	19.4	24.5	23.5	24.1	100	89	94	90	81	84
17	雨		23.5	19.0	21.4	27.0	25.5	25.7	100	85	94	90	77	84
18	晴		27.0	20.0	23.5	26.0	24.0	25.3	95	66	82	86	77	82
19	晴後曇		24.5	19.0	21.7	25.0	24.0	24.4	89	59	77	85	76	83
20	曇		27.0	19.5	24.3	27.0	24.5	25.5	94	66	81	90	81	82
21	曇		26.0	20.5	22.4	27.0	24.0	24.2	95	69	85	81	73	75
22	曇	室内育上簇	25.5	21.0	23.5	27.5	24.0	25.9	95	81	91	82	69	76
23	晴		25.5	19.0	22.1	26.0	24.0	25.0	100	58	82	90	65	73
24	晴後曇	屋外育上簇	26.5	20.5	23.4	27.0	22.5	24.9	95	69	81	73	67	71
25	雨		25.5	20.0	23.2	27.0	24.0	25.5	95	73	86	77	68	74
26	雨		21.5	18.0	20.1				100	89	95			
27	曇		20.5	16.0	18.4				100	83	92			

即ち長期にわたる旱魃から天候は次第にくずれ出し、4～5 齡は晴天少なく曇天雨天勝ちのため低温であった。特に 4 齡催眠頃よりは一段と降温し日中の最高でも 25°C 前後で、午後 8 時から翌朝 8 時頃までは 20°C 以下の日が多く、平均で 22.8°C 前後であった。又湿度は夜間より朝にかけて 90～100% の多湿であり、平均 84% 前後であった。従って

4 齡後半よりは全く低温多湿の状態にあった訳である。

次に当時の蚕室内の温度は大凡そ 24~25°C を目標に炭火補温を行ったから最高最低の開差も少なく平均 25°C 前後であり、屋外より 2~3°C 高く保たれた。しかし湿度は平均 81% 前後で屋外と大差ない状態であった。

晩秋期の飼育成績

以上のような低温多湿下の屋外飼育では、昼間の食桑状態は普通であったが、夜間から朝にかけては極度に鈍り、室内育に比して 4 齡期で約 1 日間、4~5 齡期で約 2 日間経過の延長を見た。又減蚕の一部は飼育中の膿病蚕であり、他は簇中斃蚕である。

飼育成績は第 5 表のように日 122 号 × 支 115 号を対照として比較すると、

- 1) 4~5 齡経過 日 112 号 × 支 110 号の 342 時間を除いては他品種は 349~357 時間で初秋期のように品種内に大差はない。
- 2) 減蚕歩合 (対 3 眠起) 日 112 号 × 支 124 号は 2.5% で優れ、日 124 号 × 支 124 号は 3.6% で大差はないが、他品種は劣る。
- 3) 一万頭収繭量 (対 3 眠起) 対照の日 122 号 × 支 115 号は 18.2 kg で特に優れ、次に日 112 号 × 支 124 号、日 124 号 × 支 124 号は 17 kg 前後であるが、他品種は劣る。
- 4) 一立顆数 日 124 号 × 支 124 号、日 112 号 × 支 115 号は 91~92 顆で少なく、日 112 号 × 支 124 号、日 112 号 × 支 110 号、日 115 号 × 支 108 号は 96~98 顆でこれにつき、秋花 × 銀嶺は 120 顆が多い。
- 5) 繭重、繭層重、繭層歩合 日 124 号 × 支 124 号は繭重は稍々劣るが繭層重、繭層歩合は大差ない。しかし他品種は劣る。
- 6) 生糸量歩合 日 124 号 × 支 124 号は 17.24% で優れるが、信州 × 白雪は 16.23% で稍々劣り、他品種はこれらより遥かに劣る。
- 7) 解舒 日 124 号 × 支 124 号は 85% で稍々優れ、他品種は略々同様であるが、日 112 号掛は初秋期同様に劣る。
- 8) 小類 日 115 号 × 支 108 号、日 112 号 × 支 124 号は稍々劣るが、他品種は大差ない。

なお同時に蚕室内で飼育した成績は第 6 表の如く、屋外育に比較して 4~5 齡経過は約 2 日間短かく、減蚕も少なく、繭形も若干大きい。しかし一万頭収繭量、繭重、繭層重、繭層歩合、生糸量歩合、解舒については品種によって差異があり屋外飼育とは必ずしも同傾向ではない。

要 約

四国地方で普及している夏秋蚕品種の 8 品種について本年初秋期の高温乾燥下及び晩秋期の低温多湿下で屋外飼育を試みた結果を要約すると、

- 1) 日 124 号 × 支 124 号、日 122 号 × 支 115 号の 2 品種は他品種より総合的に優れており、しかも日 124 号 × 支 124 号は初秋期の如き高温乾燥下にも、又日 122 号 × 支 115 号は晩秋期の如き低温多湿下にも良結果を得た。

第5表 晩秋期屋外飼育成績

品 種 名	母 体 別	4~5 齡			減 對 蛋 3 歩 合 起	1 收 對 萬 頭 量 起	3 一 立 顆 數	繭 重		繭 層 歩 合	生 糸 量 合	繭 糸 長	繭 糸 量	繭 織 度	對 落 回	千 米 緒 數	解 舒 率	解 舒 糸 長	小 ぶ し
		經 過	溫 度	濕 度				g	cg										
		時	°C	%				kg	%										
日 122 号 × 支 115 号	日	357	22.8	84.1	3.1	18.2	103	1.90	37.8	19.89	16.53	1082	32.31	2.69	0.23	80	866	97.5	
日 124 号 × 支 124 号	日	357	22.9	84.0	3.6	16.8	91	1.78	37.0	20.79	17.24	1136	31.55	2.50	0.17	85	966	97.5	
日 115 号 × 支 108 号	日	351	22.6	84.1	9.1	15.8	98	1.77	33.6	18.98	14.75	912	29.01	2.86	0.26	81	739	93.0	
秋 花 × 銀 嶺	日	355	22.7	84.1	4.8	15.6	120	1.66	31.5	18.98	15.73	1042	26.61	2.30	0.24	81	844	97.5	
信 州 × 白 雪	支	349	22.6	84.2	5.1	16.3	102	1.74	35.5	20.40	16.23	909	29.71	2.94	0.23	82	745	97.5	
日 112 号 × 支 110 号	日	342	22.6	84.1	4.8	14.0	98	1.67	31.0	18.56	14.90	928	25.64	2.49	0.34	76	705	97.0	
日 112 号 × 支 115 号	日	351	22.6	84.1	5.2	16.5	92	1.87	34.8	18.61	14.85	941	28.01	2.68	0.78	58	546	97.0	
日 112 号 × 支 124 号	日	357	22.7	84.3	2.5	17.0	96	1.75	32.5	18.57	15.23	890	27.43	2.77	0.48	71	632	94.0	

日 122 号 × 支 115 号を 100 とした場合の指数

日 122 号 × 支 115 号	日	100			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
日 124 号 × 支 124 号	日	100			116	92	88	94	98	105	104	105	98	93	74	106	112	100	
日 115 号 × 支 108 号	日	98			294	87	95	93	89	95	89	84	90	106	113	101	85	95	
秋 花 × 銀 嶺	日	99			155	86	117	87	83	95	95	96	82	86	104	101	97	100	
信 州 × 白 雪	支	98			165	90	99	92	94	103	98	84	92	109	100	103	86	100	
日 112 号 × 支 110 号	日	96			155	77	95	88	82	93	90	86	79	93	148	95	81	99	
日 112 号 × 支 115 号	日	98			168	91	89	98	92	94	90	87	87	100	339	73	63	99	
日 112 号 × 支 124 号	日	100			81	93	93	92	86	93	92	82	85	103	209	89	73	96	

第6表 晩秋期室内飼育成績

品 種 名	母体別	4~5 齡			1收対 万 3 眠 起	一立 顆数	繭 重	繭 層 重	繭層 歩合	生糸 量合	繭糸 長	繭糸 量	繭糸 織度	対千 米落 回数	解舒 率	解舒 長	小ぶ し	
		経過 時	温度 °C	湿度 %														減対 蚕3 歩眠 合起
日 122号 × 支 115号	日	311	25.5	81.4	1.0	18.0	99	1.85	38.8	20.97	17.80	1155	32.94	2.40	0.22	81	936	96.5
日 124号 × 支 124号	日	311	25.5	81.4	0.5	17.7	85	1.80	39.6	22.00	15.12	1208	27.55	2.05	0.37	69	834	97.0
日 115号 × 支 108号	日	299	24.5	81.2	8.4	16.5	95	1.94	35.3	18.20	15.73	937	27.91	2.68	0.33	77	721	87.0
秋 花 × 銀 嶺	日	303	25.4	81.3	2.6	15.9	113	1.65	32.0	20.00	16.29	1124	27.34	2.19	0.15	86	967	96.0
信 州 × 白 雪	支	299	25.4	81.1	5.4	15.8	95	1.71	37.2	21.75	18.30	1081	32.11	2.67	0.22	82	886	96.5
日 112号 × 支 110号	日	292	25.4	81.1	1.5	13.9	90	1.65	31.6	19.15	17.24	921	28.72	2.81	0.40	73	672	97.0
日 112号 × 支 115号	日	279	25.4	81.2	5.1	15.5	87	1.73	33.6	19.42	16.20	1001	28.74	2.58	0.20	84	841	90.0
日 112号 × 支 124号	日	307	25.4	81.4	0.8	16.7	87	1.72	34.0	19.77	15.96	969	28.01	2.61	0.65	62	601	94.0

日 122号 × 支 115号を 100 とした場合の指数

日 122号 × 支 115号	日	100			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
日 124号 × 支 124号	日	100			50	98	86	97	102	105	85	105	84	85	168	85	89	101
日 115号 × 支 108号	日	96			840	92	96	105	91	87	88	81	85	112	150	95	77	90
秋 花 × 銀 嶺	日	97			260	88	114	89	82	95	92	97	83	91	68	106	103	99
信 州 × 白 雪	支	96			540	88	96	92	96	104	103	94	97	111	100	101	95	100
日 112号 × 支 110号	日	94			150	77	91	89	81	91	97	80	87	117	182	90	72	101
日 112号 × 支 115号	日	90			510	86	88	94	87	93	91	87	87	108	91	104	90	93
日 112号 × 支 124号	日	99			80	93	88	93	88	94	90	84	85	109	295	77	64	97

2) 日 112 号 × 支 124 号 (未指定交雑) は糸質に難点はあるが、従来の強健品種より不良環境下でも良結果を得た。

宮崎支場最近の蚕作について

太田 慎一郎

宮崎支場は多量の配付用原々蚕種の製造を分担し、原々蚕種や交雑種の配付又は分譲を全国的に行う。更に共通品種試験は全部の組合せを飼育し、殊に春は掃立時期が早いのでその年の成績を早目に予察出来てその後の対策を立てるのに役立つ。又晩秋期交雑種の製造も大量で然も原蚕飼育は一化性品種が多く相当の困難を伴うがその成果は翌春に於ける本支場各種品種試験に供用せられる重要な業務である。斯様に宮崎支場各蚕期の飼育成績は蚕糸試験場が蚕品種の面で国家に貢献する窓口の一つとして重要な任務を負担している。

さて宮崎支場は終戦直前戦災を蒙り 6 棟の蚕室と大部分の蚕具類を焼失した。幸い 23 年度で一応の復旧を了え、24 年度から事業は漸く軌道に乗るようになった。最近戦後なる文字を払拭する動きがあるこの機会に、私は宮崎支場戦後の飼育成績を回顧して今後支場の使命達成に遺憾なきを期したい。

即ち第 1 表は昭和 24 年以降の雑種試験の平均成績で、第 2 表は標準品種で指定組合せとして公示された年度からの累年成績である。この 2 つの成績によれば、24 年から蚕作は年々上昇し、27 年は頂点となり、その後 28、29 年は低下し 30~31 年は多少上向き加減ではあるが大体横這い状態である。それでは 27 年は 3 期を通じ何故斯くも勝れた成績を収めたのであろうか。そうしてその後と雖も撓まざる努力を傾けているにも不拘、27 年の成績に匹敵するものが現われないのは不可解で、この点を解明することが宮崎支場緊急の課題である。原因は気象か、桑葉か、蚕種か、飼育技術か、大別してこの 4 つの中に謎は秘められている筈である。

気象 (表略) に就いては 27 年春蚕掃立前の平均気温は高く日照時数も多く好天続きであったが桑の脱苞〜第 6 開葉は比較的遅れて居ったので稚蚕壯蚕を通じ適良桑を与え得たと思われる。これに対し 24~26 年は気温は低く日照時数少なく桑の発育は遅れて用桑は軟弱であったのでないか。28 年以降はよく暖冬型で春先の桑芽は軟く従って気温は低いにも不拘、発芽は早く脱苞〜第 6 開葉は進み勝て、掃立頃には新梢は徒長し遅掃の嫌があった。斯様に 27 年春蚕が上作した原因に就いては気象及び桑の点から裏付け出来るが、初晩秋期の気温、降水量、日照時数の状態は 26 年初秋期が早魁で蘗質が劣った 1 例を除き、年度により甚しい差異は認められない。従って気象が直接又は桑を通じて間接に蚕作に影響することは当然考えられるが、27 年の初晩秋期が特に条件が良かったと断定する根拠はない。又蚕種の面でも毎年採種場所の異なる多数の原種又は交雑種を飼育するけれども、蚕種の良否が蚕作を左右した事実はない。斯様に色々の要素を絞って来ると最近の蚕作低